

大学教育開発研究シリーズ
NO.18 ● May 2013

いざな
大学院研究指導への誘い
—海外マニュアルの紹介—

立教大学
大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

いざな
大学院研究指導への誘い
—海外マニュアルの紹介—

立教大学

大学教育開発・支援センター

はじめに

画期的な報告書になった。

本書の企画意図は、第1部で寺崎氏によって記されているのであえて繰り返さないが、ひと言でいえば、日本で初めてとなる「大学院における研究指導の手引書の手引」ができあがった。ここでの二つめの「手引」は「案内」という意味であるが、一つめの「手引」は、大学教員がまさに大学院生の傍らに行き、手を携え、研究という長い道のりを共に歩きながら学位論文にまで導くという意味の「手引」である。

一昔前であれば「研究指導にマニュアルなんてあるわけがない。必要ない。」と言われたであろう。しかし、このような「手引書」や「マニュアル」が、海外に多数存在するという事実は、何を物語っているのだろうか。

その答えの一つは、かつてのような指導方法では、「研究指導」ができなくなったということだろう。つまり、現に多くの大学教員が「研究指導」に関する悩みを抱え、また、指導教員の側に反省があるからこそ、このような書物が多く出版されるに至ったのだろう。

指導教員と大学院生の関係は、一方的に教える者と一方的に教わる者という師弟関係ではない。もっとも身近な「共同研究者」なのである。在外研究の機会を得て、シドニーのニューサウスウェールズ大学 (University of New South Wales) に在籍していた際、まさにそれを実感した。大学院生は、博士論文を執筆する過程において、その一部を指導教員との共著論文として学会報告するのが一般的だった。さらには、学部学生が執筆した卒業論文でさえ、着眼点や内容が優秀であれば、ブラッシュアップして、共著論文として学会で発表する教員もいた。このような「共同研究者」としての関係性についての理解が、本報告書で紹介されているほぼすべてのマニュアルの根底にあるようだ。

ひとくちに「研究指導」と言っても、人文社会科学系大学院と理工学系大学院とでは事情が違おうだろうし、同じ人文社会科学系大学院でも、それぞれに抱えている問題は異なるだろう。たとえば、日本語を母国語としない大学院生が多かったり、社会人学生に対する指導が中心になったりと、それぞれの大学院に入学してくる学生の特徴から生まれる問題もある。

しかし、本報告書は、「研究指導」に悩むあらゆる教員に対して、問題解決の

糸口になる何らかの示唆を与えてくれるはずである。ぜひ、紹介されている書籍も手に取っていただきたい。「研究指導」の時間を大幅に節約しながら、適切に学位取得に導くヒントが見つかるかもしれない。

日本でも、海外のように多様な「研究指導ハンドブック」が出版され、その存在が、大学教員にとって身近なものとなり、特別なものと意識されなくなるほど浸透する日が来れば、研究指導のための共通技法が確立することになるのだろう。その過程で、必然的に研究水準も向上するのではないだろうか。本報告書が、そこに至るまでの長い長い道のりの第一歩になることを確信している。

大学教育開発・支援センター副センター長、経済学部准教授

小澤 康裕

はじめに 小澤康裕	2
-----------------	---

第1部

1. 本書の企画と目標について	11	寺崎 昌男
2. 研究室教育はどこへ向かうのか〔特別寄稿〕	15	近田 政博

第2部

1. 6冊の文献について	23	寺崎 昌男
2. リチャード・ジェームス他著 『研究指導を成功させる方法—学位論文の作成をどう支援するか—』	27	寺崎 昌男
3. Moira Peelo著 『Understanding Supervision and PhD: Essential Guides for Lecturers』	33	寺崎 昌男
4. John M. Braxton他著 『Professors Behaving Badly: Faculty Misconduct in Graduate Education』	39	谷村 英洋
5. Lucy Russell著 『Dr Dr, I feel like... doing a PhD』	47	寺崎 昌男
6. Joan Bolker著 『Writing Your Dissertation in Fifteen Minutes a Day: A Guide to Starting, Revising, and Finishing Your Doctoral Thesis』	53	谷田川 ルミ
7. エステール・M・フィリップス他著 『博士号のとり方—学生と指導教官のための実践ハンドブック—』	59	寺崎 昌男
おわりに 今田 晶子	66	

大学院研究指導への誘い^{いざな}

—海外マニュアルの紹介—

第 1 部

1. 本書の企画と目標について

立教学院本部調査役、大学教育開発・支援センター顧問
寺崎 昌男

大学院における研究指導のためのテキストを幾種類か選び出して解説を加え、集成した冊子を出してみたい。——当センターから『博士後期課程の一層の充実に向けて一学位へのステップを整える—』（調査報告シリーズ4、2012年4月）が発刊されたとき以来、ずっとこのように考えてきた。

実はその報告書に、第6章として、「海外における「研究指導」論—テキスト紹介」を書いたのは筆者であった。そして、このような章を立てて寄稿したいと思うようになったきっかけは、近田政博名古屋大学准教授が翻訳されたメルボルン大学のR. ジェームス、G. ボールドウィン著『Eleven Practices of Effective Postgraduate Supervisors』（邦訳名『研究指導を成功させる方法』）に触れたからである。

筆者がこのブックレットに触れたのは2008年1月のことであったが、大いに刺激を受けたことを憶えている。

刺激とは下記のようなものであった。

- ① このような大学院指導に関するマニュアルを共有することは、日本の大学院にとって緊急に必要なことである。大学院が急激に拡大しつつあるにもかかわらず、大学院教育の方法や技術に関する専門性ある研究開発作業は大幅に遅れている。
- ② 近田氏によって示されたのは、オーストラリアの代表的大学における大学院教育マニュアルだが、アメリカ、カナダ、イギリス等のアングロ・サクソン系大学の大学院でも、やはり同じような教育方法開発が行われている

に違いない。いつかそれらを展望して、大学院教育の研究開発のマップを作りたい。そうすれば日本で今後大学院教育を改善・開発するための重要なヒントになるのではないか。

- ③ 大学院教育に関する理論的・技術的探究の遅れは、学士課程教育についての研究がかつて大幅に遅れていたことを思い起こさせる。

ただし後者の場合、周知のようにさまざまな形でイノベーションが進んでいる。しかし前者すなわち大学院教育のほうは、近田氏の指摘の通り、教育方法開発は進んでいない。特に人文・社会科学部門では未着手の状態に近いといつてよい。このままでは、量的拡大と方法開発のズレは、拡がる一方になるのではあるまいか。何らかの対応が要請されている。

こうした刺激を有難いものとして受けながら、筆者は前記の立教大学から発行された報告書の発刊に協力した。その中では、当センターの谷村・谷田川両学術調査員と今田晶子課長と共に行った、「現に先進的な大学院教育を行っている日本の大学院研究科」へのヒアリングの記録が中心的な内容であった。

しかし、同書第6章の文献紹介だけでは範囲が狭すぎ、また少なすぎる、という思いが消えなかった。さらに、その後大学教育開発・支援センターで、大学院および大学院教育開発の、主として英文文献を収集し続けたところ、海外では膨大な数のマニュアル本が出ていることを、今さらのように知った。

そこで生まれたのが、本書の企画である。すなわち、大学院研究指導に関する文献をさらに広く収集し、その中から示唆深いものを、目次紹介を兼ねて解説し、日本の諸大学に紹介してみてもどうか。またその報告書（本書）には、大学院教育の開発について先駆的な翻訳活動と解説を刊行された近田政博准教授にも寄稿を願ってはどうか。

このような趣旨のもとに前記の3氏と共に文献研究と紹介文の作成を進め、本報告書の公刊に至ることができた。

センターが何よりも感謝しなくてはならないのは、近田氏が、大学の境界を越えて、本報告のために文章をお寄せ下さったことである。TAやRAのための訓練、あるいは将来の大学教員としての事前的訓練等の形をとって、日本でも大学院生の教育については先駆的な取組みが起きている。氏の文章が加えられることによって、このような実践が開発のスピードを強め、さらに大学院における研究

指導が広く開発されるようになるとすれば、本書の企画は報われる。とりわけ、拡大を続けてきた本立教大学大学院における研究指導のイノベーションに、本書が何らかの役割を果たすことができればと願わずにはいられない。

なお、最後に一つのエピソードをつけ加えておこう。

この数年間、筆者は知己となった大学院教員諸氏の誰彼を掴まえては聞いてみた。「大学院の研究指導というのは英語で何と言うか知っていますか?」。答えは「research leading ですか?」というのがほとんどで、supervision ないし supervising と答えた人はこれまでのところほとんどいなかった。

「研究指導」とはたとえば共同研究を主宰したり指導したりすることではない。大学院生自身の研究活動をより広い視野に立ってガイドし、指南することである。super + vision という複合語は、このような意味を負っていると思われる。英語知識の不足は、日本のキャンパスにそのような認識ないし行動意識がまだ薄いことを示しているのではあるまいか。

本書で紹介した文献の内容が、大学院指導の向上に資するところがあれば幸いである。これまでの研究活動を承認し、開発研究シリーズの1冊として刊行をバックアップしてくださった当センターに厚く感謝したい。

2. 研究室教育はどこへ向かうのか 〔特別寄稿〕

名古屋大学高等教育研究センター准教授
近田 政博氏

近年、国の主導によって、大学院教育改革のためにさまざまな競争的資金が配分されている（「魅力ある大学院教育イニシアティブ」、「大学院教育改革支援プログラム」、「博士課程教育リーディングプログラム」など）。これらは、コア科目や基礎教育の強化、複数教員による研究指導体制、グループ学習、フィールドワーク、海外ネットワークの形成などに特徴がある。その主眼は、従来の個別の指導教員およびその研究室任せになっていた大学院教育を講座や専攻などの組織全体で整備することに置かれている。

さらに2012年3月には大学院設置基準が改正され、「博士論文研究基礎力検査」によって一定の基礎学力が認められれば、これを修士論文に代替することができるようになった。背景には、大学院生がタコツボ型の研究室教育で狭いテーマに限定した研究に専念することで、幅広い能力形成が妨げられてきたとする中教審、文科省、経済産業省などの強い危機感がある。ただし、新制度の運用は各大学・各研究科の裁量に任されている。私の勤務先である名古屋大学のほとんどの研究科では、新制度の運用に慎重な姿勢を崩していない。第一の理由は、修士論文を書かずに博士後期課程に安易に進むバイパスが生まれることを危惧したからである。第二の理由は、幅広いコースワークを修めるからといって、修士論文を経験せずにいきなり博士論文を書くことはあまり現実的ではないと考えたからである。

研究室教育をめぐるのは、政府と大学の間にかような緊張関係が存在する。なぜ研究室教育は政府や世間からの批判にさらされているのだろうか。40代以上の大学教員の多くは、研究大学において徒弟制の色濃い研究室教育で育った経験

を共有している。かつてそこでは少数精鋭主義による濃密な人間関係が築かれ、院生相互で切磋琢磨する機会に恵まれた。指導教員が親身になって就職の世話をしてくれる場合もあった。その一方で、研究室の閉鎖性や密室性がパワハラの温床となりやすく、研究の成否は指導教員との個人的な関係に大きく左右された。授業料を払う立場の大学院生が学会運営や研究室運営において日常的に「ただ働き」「滅私奉公」を強いられるという負の側面もあった。

大学教員の能力開発という視点から捉え直してみると、研究室運営のロールモデルは、ほとんどの場合、自分の指導教員の事例のみである。私の知る限り、自分の師匠のやり方を反面教師としている人も少なくない。いずれにせよ、授業のやり方については互いに多くの事例を知っているが、研究室運営や研究指導の事例・ノウハウはほとんど共有されていない。寺崎昌男氏がいみじくも指摘したように、もともと研究室教育は密室化しやすく、教員間には相互不干渉の文化が強く残っている。しかも、自分の指導教員から実質的な指導をほとんど受けずに放任され、自力でなんとかサバイバルしてきたという大学教員は多い。彼らは現代のモラトリアム化・大衆化した大学院生を眼前にして、どこから手をつけてよいか途方に暮れている。

困っている教員を支援する仕組みも未整備なままである。多くの大学に設置されている大学教育関連センターが教員を支援する射程は、たいていの場合、学士課程教育における授業活動に限定されている。他方、教務・学生担当職員からみれば、授業は学生の顔を見ながら履修管理できるのに対し、研究室はまさに「奥の院」であって、「神聖にして不可侵」の空間だった。研究室教育は研究大学の「本丸」であり「生命線」であるにもかかわらず、そのマネジメントに責任を負う教員は、図らずも孤立無援の状態に置かれてきたのである。

理工系の研究室教育については、北陸先端科学技術大学院大学が2012年にまとめた『理工系大学院における研究室教育実態調査報告書』が興味深いデータを提供している。同調査では、大学院教育をコースワーク（授業等）、研究室全体の活動、個別指導に分けて、それぞれで身につく知識・技能・態度を教員と大学院生の両方に回答を求めた。その結果、コースワークに対しては、教員も大学院生も評価が低い。研究室全体の活動については教員も大学院生も評価が高い。しかし、個別指導については教員による評価と大学院生による評価には大きなギャップが存在する。具体的に言えば、論理的思考力、研究意欲、責任感などの

項目において、教員は個別指導の効用を高く評価しているのに対し、大学院生の側の評価は低いのである。これは何を意味しているだろうか。私は、他の多くの研究大学で調査しても、同様の結果が得られるのではないかと思う。

研究指導を担当する教員なら誰でも知っていることだが、基礎スキル習得のための授業や共通科目を設けるなどの方法でどんなにコースワークを充実・整備しても、それだけでは学生は学位論文をなかなか書けない。論文を書く段階になると、コースワークで学んだ内容の大部分はもう忘れていたからだ。また、受信するスキルと発信するスキルは同じではない。たくさんインプットしなければアウトプットはできないが、インプットするだけではアウトプットできるとは限らない。インプットは論文を書くための必要条件であって、十分条件ではない。学術論文を書くという行為は「置の上の水練」に似ていて、実際に書いてダメ出しをされるというプロセスを繰り返しながら、何度も痛い目に遭いながら学ぶしかないのだ。学位論文作成を山登りにたとえるならば、八合目あたりからは指導教員とのこうした「二人三脚」がきわめて重要な役割を果たしているという点は、今も昔も本質的に変わらない。

では、われわれ教員はどうやって大学院生の個別指導に臨めばよいのか。絶対解があるならば誰も苦労はしない。しかし、いくつか指摘できることもあるように思う。第一に、学位論文の作成はそれ自体が目的であるというだけでなく、何らかの知識やスキルを獲得するための手段やプロセスでもあるという事実を、教員側が強く自覚することだ。今日の大学院生のうち、プロパーの研究者を目指すのはほんの一握りにすぎない。大学院生は論文を書くという経験を通じて、専門分野の知識だけでなく、語学、実験、社会調査、統計、論理的・批判的思考、研究倫理、コミュニケーション、健康・ストレス管理、時間管理、礼儀作法、社会常識など、多種多様な知識・スキルを獲得している。

第二に、他大学出身者、社会人、外国人留学生の占める割合が大きくなっている現状を踏まえて、彼らに適した教授法や研究指導方法を工夫することである。私自身が指導教員としてこれまで接してきた学生はいずれも上記の3類型にあてはまる。この傾向はいわゆる文科系の大学院では顕著であり、同一大学の学部から大学院への内部進学者は少数派である。他方、大学教員には伝統的な研究大学で学士課程から大学院課程に至るまで一貫して過ごした人が少なくない。大学教員にとって、上記の3類型の学生と接することは一種の「異文化体験」なの

である。今日の大学院教育は、こうした「異文化」を尊重し、相互理解に取り組むことから始まる。

たとえば、発展途上国からの外国人留学生を受け入れる場合に留意すべきは、論理的に思考し、問いを立てる能力をつけさせることだと強く感じる。たとえ母国で一流大学を卒業していても詰め込み型の勉強しか知らない留学生にとって、自力でリサーチクエスチョンを立てて、論証するという経験は初めてのこともかもしれない。他大学出身者を受け入れる場合は、研究大学独特の文化に適應できるかどうか、学位論文を書くのに必要な基礎学力が十分に備わっているかに留意する必要がある。社会人学生を受け入れる際は、彼らをこれまでの「職場経験の呪縛」から解き放ち、研究をメタ的に俯瞰する思考習慣をつけさせることが鍵となる。専門知識だけでなく、研究方法論についても一定のサポートが必要だろう。

私自身、ゼミ運営で最近いくつか取り組んでいることがある。2012年4月からはメーリングリストに代えて、フェイスブックグループ「平成24年度近田ゼミ」の運用を開始した。月1回ペースで行うゼミ以外での情報共有や意見交換を補う目的で用いている。これにより、研究室メンバーとより円滑かつ迅速なコミュニケーションをとれるようになった。また、平成24年度からは遠隔に在住する社会人院生向けに出張研究指導を行っている。これは大学院生にとっては経済的・時間的・心理的ストレスを軽減できる一方、私にとっては一時的に職場を抜け出す気分転換になる。留学生や他大学出身者向けには「アカデミック・ライティング」（論理的に日本語を書くこと）や研究計画書の書き方の基本について各種セミナーを開催している。日常会話の日本語表現と学術的な日本語用法は大きく異なることを彼らに知ってもらい、個別指導の際の労力を軽減したいからだ。

まだ中堅教員の私には、研究室の個別指導について絶対解を見つけるほどの経験と力量はない。あれこれと試行錯誤を繰り返しながら、一歩ずつ前に進むしかないと考えている。

第 2 部

1. 6冊の文献について

冒頭の「本書の企画と目標について」で触れたように、以下の章では6種の「研究指導ハンドブック」を紹介する。

海外では大学院教育のあり方が正面から考えられているという近田政博准教授（名古屋大学）の指摘に刺激されての企画である。

最も深刻な現象は、日本の大学院において「研究指導の技法が共有されていない」という問題である。「研究指導のためのガイドの不在」はその所産である。さらに根本には「共有すべき共通技法の不在」がある。

諸外国ではこの点はどのように克服されているだろうか。当面手に取ることの出来る大学院指導のためのテキストを手がかりに探してみたい。その最初の試みが、第1部の1で述べたとおり『博士後期課程の一層の充実に向けて一学位へのステップを整える』（大学教育開発・支援センター、調査報告シリーズ4、2012年4月）の第6章で試みた「海外における「研究指導」論—テキスト紹介—」であった。

本報告書ではその際執筆した3篇の文献紹介を再録し、新たに3著の紹介を追加した。

もちろん大学院教育のあり方や改善についてふれた内外の文献、特に海外の文献は既におびただしい数にのぼっている。本来はそのすべてを見渡した上でいくつかのテキストに絞って紹介・批評すべきであろう。しかし現在もまだ調査は途上であり、その作業は不可能なので、本書をこれまでの成果報告としたい。

次章から紹介する全6著の題名は下記リストの通りである。

2. リチャード・ジェームス他著
『研究指導を成功させる方法—学位論文の作成をどう支援するか—』
3. Moira Peelo 著
『Understanding Supervision and PhD: Essential Guides for Lecturers』
4. John M. Braxton 他著
『Professors Behaving Badly: Faculty Misconduct in Graduate Education』
5. Lucy Russell 著
『Dr Dr, I feel like... doing a PhD』
6. Joan Bolker 著
『Writing Your Dissertation in Fifteen Minutes a Day: A Guide to Starting, Revising, and Finishing Your Doctoral Thesis』
7. エステール・M・フィリップス他著
『博士号のとり方—学生と指導教官のための実践ハンドブック—』

第1に、出版地について述べておこう。

近田准教授が翻訳された2.『研究指導を成功させる方法—学位論文の作成をどう支援するか—』はオーストラリアで、4.『Professors Behaving Badly: Faculty Misconduct in Graduate Education』と6.『Writing Your Dissertation in Fifteen Minutes a Day: A Guide to Starting, Revising, and Finishing Your Doctoral Thesis』はアメリカで出版されている。3.『Understanding Supervision and PhD: Essential Guides for Lecturers』、5.『Dr Dr, I feel like doing a PhD』、7.『博士号のとり方—学生と指導教官のための実践ハンドブック—』の3冊はイギリスでの出版である。ただし3と5の2冊は、アメリカにおいても出版されている。

このような国別分布は、紹介書の選択をもっぱら英語文献に限ったことによるが、イギリスを除くヨーロッパ大陸諸国の大学院でもおそらく同じようなテキストやマニュアルが出されているであろう。今後調査しなければならない。

第2に、主として誰に向けて書かれたものかという点で、6著は大きく3つに

分かれる。

2～4は、主として研究指導を行う教員向けに書かれている。ただし、4は大学院教員を対象とした調査研究の成果をまとめたものであり、研究指導の指南書という趣ではない。

他方、5と6は研究指導を経て博士号取得を目指す大学院生向けに書かれている。7は、その副題にもあるように、教員と大学院生の両者に向けて書かれている。

海外の大学院研究指導というものを理解していくには、教員の視点からだけでなく、大学院生の視点からアプローチすることも欠かせない。もちろん、同じく教員向けまたは大学院生向けの著作であっても、力点の置き方や、読み物としての性格は、各書で随分異なっている。これらの文献の吟味を通じて、今後日本で大学院研究指導法や指導理論を建設してゆくための出発点と示唆を探りたい、というのが筆者たちの願いである。

同じアメリカその他の発行文献にも、さらにインフルエンシャルなものがあるであろう。他方、進展著しいアジアの新興国の大学院でも、大学院教育の探求は大いに進められているに違いない。これらのテキストやマニュアルを含めて、本書の「新版」が出されれば、日本の大学院教育の開発・改善に対して大いに役立つことであろう。

ただし当面のところ、本書が立教大学大学院教育を担当されている教員の方々、またその教務作業を担われている職員の方々に活用されることを心から願っている。

(寺崎 昌男)

2. リチャード・ジェームス他著 『研究指導を成功させる方法 —学位論文の作成をどう支援するか—』

リチャード・ジェームス、ガブリエル・ボールドウィン著
近田政博 訳
株式会社ダイテック、2008年

<原著>

Eleven Practices of Effective Postgraduate Supervisors

Richard James and Gabrielle Baldwin

Centre for the Study of Higher Education and The School of Graduate Studies, The University of Melbourne, 1999

先ず取り上げるのは近田氏訳による上記のテキストである。B5版のブックレットタイプの冊子で、全63頁である。リチャード・ジェームス、ガブリエル・ボールドウィンによる上掲原著の刊行は1999年と意外に早かった。ただし訳書では「11の実践原理 (Eleven Practices)」というタイトルは略され、大学院の「研究指導」というテーマが正面に掲げられて、指導技法の検討と探究を一貫して述べる本となっている。この内容からしても、本邦初の大学院教育法文献である。

ところで原本の題名を直訳すれば上記のとおり『大学院指導者のための11の実践原理』である。オーストラリア・メルボルン大学をベースに作成されたものである。著者のうちジェームズは同大学教育学部高等教育学講座教授であり、高等教育研究センター長を兼担し、ボールドウィンは、そのセンターの高等教育コンサルタント兼首席研究員となっている。Foundations(訳では基礎編)、Momentum(同、応用編)、Final stage(同、仕上げ編)の3編からなり、付録としてメルボルン大学がどのような大学院生向けサービスを行っているかという一覧資料が付けられている。

題名や内容からしても、原著は、先の両教員の個人著作というかたちを取っているものの、半ばは大学自身の公的出版物の扱いを受けていると想像される。このような事情も考慮し、以下、訳書・原著を含め、本書のことを「メルボルン・テキスト」と呼ぶこともある。お断りしておきたい。

さて、「基礎編」の見出しは次の4節からなる。

基礎編

1. 学生との信頼関係をつくろう
2. 学生のことを知ろう、そして彼らがどんな研究をしたいのかを把握しよう
3. 学生に対して適切で、かつ学生と教員双方が合意できるような期待を寄せよう
4. 学生と一緒に取り組み、頑健な理論枠組みと研究計画を立てよう

一見して分かるように、院生と指導者の「合意」に立つ指導場面をつくる、という課題が、第1に重視されている。

特に研究の開始段階で大切なのは、第1に教員の側の自己反省（「自分はこの学生の志している分野の指導が出来るかどうか」など）、第2に指導教授を選ぶ学生の側の賢明な選択、の二つである。ただし、教員の側の責任感と院生の側の賢明さとが個別的に重要なのではなく、双方の「関係」が重要だと説かれている。別の箇所では、学生と指導教員との組み合わせが完璧なケースなどほとんど存在しない、ということを確認しつつも、「私はこの人物と基本的な関係を築けるか?」「十分に意思疎通できると思うか?」というように、「持続可能な関係づくり」をめざして双方が自問していくことが必要だ、と説いている。

このような発想が、他のテキストにも見られるかどうか、後に確かめていきたい。それはともかく、「基礎編」をなす前記1～4は、それだけで25頁で、本文部分54頁の半分近くになる。それほど比重が上記の「関係性の構築」というテーマに置かれているのである。叙述は人間関係のデリケートな部分にまでおよんでおり、その分、メルボルン大学大学院という空間を超えて、示唆するところは極めて普遍的である。

筆者は通読しながら、日本の大学院指導改善のためにメモしておこうと思う箇所が幾つもあった。特に、被指導学生との関係を築く責任について、教員に対す

る要請が極めて厳しいことが印象に残った。

例えば次のような文章がある。

「学生の心理的なニーズを知ることは、学問的なニーズ〔を知ること〕以上に難しいかも知れません。…たとえば、一見落ち着きがあるが自信がまったく欠如しているという学生の場合、データ解釈の際にいつまでもデータ収集をやめられないという事態になって初めてそのことが露呈します。指導教員と学生の関係がうまくいかどうかは、結局のところ、教員の感受性と機転にかかっているとえます。」(p.10)

大学院の研究指導は、人間性への「感受性」や時機に即した「機転」(原語は tact) が要求される職務だ、と強調されている。それは、本書の盛るアドバイスが綿密な調査と洞察にもとづくものであることを推察させる。

後半すなわち前掲 1～4 に続く 5～11 までは、研究指導のプロセスにおいて気を付けるべき注意事項である。訳書では「応用編」と「仕上げ編」とに分かれる。

論文執筆の奨めから学生の研究成果の精査すなわち評価までにいたるが、展望のためには見出しを再掲するのが便利である。

応用編

5. 学生に早めに、そして頻繁に書くように勧めよう
6. 学生と定期的に連絡を取り、良質なフィードバックを与えよう
7. 学生が大学院生活に没頭するように促そう
8. 学生に知的刺激を与え、研究意欲を高めるように支援しよう
9. 学生に研究上および個人的な問題が発生した時は支援しよう

仕上げ編

10. 学生の将来のキャリアについて考えてみよう
11. 学生の最終的な研究成果を精査しよう

要旨は上に尽くされていると思われるが、2、3の点を補っておく。

第1に、「早めに、頻繁に書く」（前記5）ことを勧める理由の一つは、テーマが大きすぎることを学生自身に気づかせるためである。

「研究課題が大きすぎると、学生が書き始めるのを後回しにして、データ収集を継続したり、さらなる読み込みを行ったり、まるで蜚気楼を追い続けるように、新しい課題を増やし続けるという悪循環に陥ってしまうのです。」(p.26)

他方、著者たちは、早く書くことを奨めた教員の側は、「早い段階から学生が書いたものを論評してあげるべきです」、とも言う。そのことによって、教員は「学生が学位論文という特殊な文章を書く上で、自分に適した執筆スタイルを身につけ、自分なりの見解を持てるように支援をする」ことができるからである。

執筆上の障害としては、学生側における中心コンセプトに関する戸惑い、資料の扱いに関する自信の無さ、議論の論理の不明確さ等があったりする。そのようなときこそ「指導教員は問題が解決されるまで積極的に指導的役割を果たす必要があります」と言う。この要請を満たすためにも早い時期からの執筆が求められる、という含みになっている。

第2に、「良質なフィードバック」（前記6）としては何が奨められているか。良質なフィードバックが実現することは何よりも学生の学習意欲を育てるのだ、と強調した上で、著者たちは、具体的な方法を実に懇切にあげている。

すなわち、研究室を快適な環境にし電話で対談を中断されたりしないようにしておく、研究指導の時間について合意し、また必ず次回面談の日時を取り決めておく、研究に関して形式張らず広範囲にアイデアを探究する、学生個人個人の研究指導記録のファイルを作成する、等である。

第3に「学生を大学院生活に没頭させる」という提言（前記7）は、メルボルン大学を「学習コミュニティ」として大学院生たちに意識させようということである。自分の研究が教員によって対等に認められると感じていること、専攻のメンバーだけでなく他専攻メンバーとも交流できるようなセミナー等の機会を与えられること、多くの時間を専攻のための場所で過ごすように仕向けること、等が重要だと記している。

そして著者たちは次のように断言する。

「学習コミュニティを作ること、そして学生がその一員であることを保証することは、個々の指導教員や大学院コーディネーター (Postgraduate Coordinator) の責任です。同時に、学生も大学院生活を充実させる上で率先して行動することが求められます。」 (p.35)

以上の他にも紹介すべき重要な論点は多々あるがいまはこれにとどめよう。

全体として見て Melbourne Eleven Practices と略称されるだけの実践即応性と体系性を持ち、従って具体性も持つテキストである。同様のマニュアルないしテキスト皆無の日本の状況からすれば、十分に敬意を払うに値する著作であり、何よりも、学生の学習と成長に対する大学と教員の責務が極めて重視され、終始強調されている点で、まさに翻訳される価値を持つ文献だということができる。

なお、このテキストには、基盤をなすメルボルン大学大学院の実況が、さまざまに形で触れられている。たとえば、修士課程学生の64%は毎月1回以上、博士課程学生の場合は、28%が週1回以上、80%以上が月1回以上の研究指導を受けている。他方、大学院全体で90カ国以上からの留学生を受け入れており、それは教員と学生双方が異なる文化的背景を抱える原因となって、研究指導に複雑さを与えており、教員側に特段の配慮を求める要因となっている、等々。

このような状況が随所で触れられており、こうした丁寧な実態把握がこのテキストにリアリティーを与えるとともに、新任の大学院教員への入門テキストとしても活用できる文献になっている。

訳者の近田氏は、本書の意義として、

- ① 「研究指導において「最低限行わなければならないこと」、および、「してはならないこと」を明示したこと」
- ② 「研究指導においては、いかなる組織的対応よりも指導教員と学生間の信頼関係にまさるものはないということを明示したこと」
- ③ 「大学院での研究・学習・生活をスムーズならしめるには、個々の指導教員に全面的に依存するのではなく、大学としての組織的なサポートが不可欠だということを明示した」こと

の3つを指摘している (p.58-59)。

(寺崎 昌男)

3. Moira Peelo 著 『Understanding Supervision and PhD: Essential Guides for Lecturers』

Continuum International Publishing Group,
London, New York, 2011

タイトルは「研究指導と博士課程を考える」とでも訳しておけばいいだろうか。「大学院教師のためのエッセンシャル・ガイド」という副題も付けられている。

著者のモイラ・ピーロは、イギリス・ランカスター大学の学習支援センターのコーディネーター経験を持つ教育コンサルタントであり、本書は Continuum 社によってロンドンとニューヨークで出版されている。同社は、本書のほか、Lucy Russell の『Dr Dr, I feel like...doing a PhD』や Manuel Martinez-Ponds の『Continuum Guide to Successful Teaching in Higher Education』といった本を出版しているという。高等教育関連の書籍をひろく出版している専門出版社であろう。

本書は、ひとくちに「テキスト」といっても、研究指導の環境作りやスキルに力点を置くものとは大いに性格を異にしている。

この本で著者ピーロがエネルギーを注いでいるのは、「研究指導」という活動の構造と本質を解明することである。従ってまた、本書で重視されている主題は、研究指導の技術論ではなく、指導者と被指導者の関係論でもない。もちろんそれらへの関心が全くないのではないが、より多く、PhD コース在籍学生の専攻テーマや専門パラダイムと本人との関係、研究指導の昔と今の比較論等に関心を払っている。印象としては、経験を積んだ世代の研究指導者に対してよりは、むしろ新進の若い大学院教員への理論的語りかけを重視しているように感じられる。

内容を詳述するよりも、目次をやや詳しく紹介する方が手っ取り早く理解できると思われる。

それぞれの章の末尾には「研究指導への示唆」(Implications for Super-

序論

本書の概要／基礎となった調査について／「研究指導」の分析と紹介

第1部 研究指導の構造

1章 教授、学習そしてリスク

教授活動としての研究指導／研究能力開発におけるスキルと社会性：ライティング指導の例から／研究テーマの専門化とリスク／博士課程の大学院生活とリスク／研究指導への示唆

2章 社会的・学術的活動の指導－その政治学

「さまざまな期待」という危機？／暗黙知：PhDは「試験」であり、切り抜ける事を考える／パラダイムの崩壊と学問的位置取り／アカデミック・ライティングへの支援／ドラフトを完成する／学者になる：ヒエラルキーの中で知識の所有者となること

第2部 カギになる部分を透視する

3章 課程を終える：魔王を打ち負かす

反応を見渡す／好ましい経験、悪い経験／研究指導／(テーマの)変更

4章 進歩し研究指導を経験する現代の学生たち

進歩するということ／何が進歩を妨げるか？／研究指導のもたらす恵み：指導グループと学術研究文化／研究指導を体験する－その概観／よいシナリオ、悪いシナリオ、そして善悪ない交ぜのシナリオ／ジェンダーと専門訓練

5章 二者択一の見方

コミュニケーションと期待／研究指導者の訓練と養成／テーマの変更：想像される部外者の影響／研究指導者のモデル

第3部 研究指導者の昔と今

6章 研究とは何か－分かれる見方

対応を展望してみる－分かれる見解／指導者のグループ－性別と経験／指導者と学生の関係：配慮と楽しみ

7章 研究指導者になるための学習

専門的技術を伸ばす－新しい指導者になるということ／過去の経験をなぞる－博士課程の学生に還る／疑問に思うこと－他者から学ぶ／研究指導の期待

8章 経験が語るもの

研究指導の「^{なま}鏡み構造」／協同的な研究指導とは／批判受容を学ぶ／うまく行かないとき

第4部 能力開発とトレーニング

9章 研究指導者の養成課程：訓練と能力開発

振りかえる／研究指導者はどのように考えているか／技能の再構築／研究会や訓練

vision) という小節が設けられている。

著者が序論で述べているように、第1部は「研究指導」という活動の舞台が置かれている位置の微妙さを分析し、また著者自身の指導経験を語っている。第2部では、研究指導者と被指導者たる博士課程学生との置かれている位置を、広い視野のもとに点検している。第3部では、研究指導者そのものの種類や属性等を若年者・経験者、初心者・経験者等に分けつつ具体的に論じる。第4部は、タイトル通り、研究指導者の訓練と能力開発すなわち大学院教員のFDを論じた章からなり、同時に本書の基本テーマをめぐって検討している。

既に目次一覧から推察できるかも知れないが、本書のテーマや方法を具体的に紹介することは極めて難しい。学術書としての性格を濃厚に持っているからである。当面は全面的な紹介は避け、「研究指導者」を論じた第3部に含まれる8章「経験が語るもの (The Voice of Experience)」の最初の部分だけに絞って、内容を要約してみよう。

この節で、著者は12名の優秀な研究指導者たちにインタビューを試みている。それをもとに記しているのが、4つの小節である。

第1の小節では「研究指導の^{たわ}組み構造」(Flexi-structures)を論じる。それは博士課程の学生たち誰もが通る屈折したステップのことである。インタビューの中から、著者は、優秀な指導者は学位への pathway をよく心得ている、という。

1年次の初め、大学院生生活のスタート前に必要となるのは「動機付け」であり、そのためには面会の約束をしっかりと交わすことが重要である。2年次に来るのは概ね戸惑いであり、そのとき院生たちが熱中するのは「データ収集」である。それはある意味で魅力的なステップであるが、時には2か年3か年と費やされてしまうことがある。

研究の最終段階に近くなってから重要なのはコミュニケーションである。著者はインタビューしたある指導経験者の次のような言葉を引用している。

「私はいつもすべての指導生たちに対して、次のことを分からせるようにしています。それは『君の論文のテーマは、君が考えているよりもずっと広い専門分野と文脈において繋がっているのだ』ということです。また私は、指導生たちが、一人残らず実力ある専門家になること、言いかえれば彼等の専門分野のトピックについて広く表面的なことを知っているだけ、といった

人たちとは違う、遙かに力のある専門家になってほしいと思っています。』
(p.142)

こうしたインタビューをふまえて、著者は、優秀な研究指導者の資質能力について次のように言う。

すなわち、大学院生自身について、学位取得への道筋について、そして専攻分野における真実の達成は何かについて、さまざまな知識を構造的に持ちながら、指導生たちに学位への「門衛」として働くことができる人物である。さらに研究指導実践の重要な目的は、指導生たちを孤立した研究者に育て上げることではない。広いプロフェッショナルな世界の一員として、十分なコミュニケーション力を備えさせることにある。

以上は本書のごく一部分の紹介にすぎない。しかし、著者が単に自分のアイデアや理論だけを展開しているのではなく、十分に実証的な手続と基盤にもとづいて論議を展開していること、先にも述べたように論述の中身には論理と共に指導スキルへの配慮もあることが紹介できていれば幸である。

大学院教員への「ガイド」とうたいながらも、本書は理論分析的な比重の高いテキストの一つに数えられよう。

(寺崎 昌男)

4. John M. Braxton 他著 『Professors Behaving Badly: Faculty Misconduct in Graduate Education』

John M. Braxton, Eve Proper, and Alan E. Bayer
The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 2011

タイトルを直訳すれば『不適切にふるまう教授たち：大学院教育における教授たちの誤った行為』となる。否定的な表現が並ぶが、間違った大学院教育の実態について明らかにする本ではない。本書の多くは、教員たちが大学院教育においてどのような行為を「まずい、不適切だ」と考えているのかを質問紙調査によって明らかにし、そこから大学院教育の規範（norm）なるものを描き出すという作業に割かれている。噛み砕いていえば、本書は、米国の大学院教員の「べからず集」を提示してくれている。

3名の著者はいずれも高等教育の研究者である。John M. Braxtonは、テネシー州にある私立Vanderbilt大学のPeabodyカレッジで教授の職にある。同カレッジの大学院課程はU.S. News & World Report誌の教育分野ランキングで最上位校の一つとなっており、高い名声を得ている⁽¹⁾。カレッジのウェブサイトによれば、氏はアカデミックプロフェッションの社会学的研究等に関心のある領域として挙げている⁽²⁾。

Eve ProperはVanderbilt大学で博士号を取得した高等教育研究者で、現在ニューヨークのファッションビジネス系カレッジで助教として経営学や組織論を教えている。

Alan E. Bayerは、ヴァージニア工科大学リベラルアーツ & 人間科学カレッジの名誉教授で、Braxtonと共同で教員・学生関係の社会学的分析等を行っている。また同大のサーベイリサーチセンターの名誉ディレクターでもあり、社会調査のエキスパートのようである⁽³⁾。

さて、本書の輪郭は目次からおおむね把握することができるだろう⁽⁴⁾。

イントロダクション 大学院教育における規範の大きな役割

規範とサービスの理念型／大学院教育において規範が果たすその他の役割／大学院でのティーチングとメンタリングにおける規範構造の存在（学者と研究の役割遂行における規範構造／学士課程におけるティーチングの規範構造）／大学院でのトレーニングの中にみられる、規範に基づく役割遂行を測定するための概念枠組み／本書の研究課題：大学院でのティーチングとメンタリングにおける規範構造の追究／本書の構成

※（ ）内は項の見出し

1章 大学院でのトレーニングにおける教員の不正の事例

ある学科長が報告した教員の不正行為／恥ずべき傲慢な大学教授／なかなか会えない教授と過度な要求をするアドバイザー／剽窃、詐欺、著作権者の権利をめぐる紛争／教員の指示による研究上の不正／セクシュアル・ハラスメント／ディスカッション

2章 研究デザイン

質問項目／サンプリング（大学のサンプリング／専門分野のサンプリング）／抽出と実査の手順／最終的なサンプル／回答者属性／ディスカッション

3章 大学院教育の規範の構造

不可侵の規範（学生の努力への敬意のなさ／学生の業績の横取り／学生への嫌がらせ／不正の隠ぺい／指示に基づく研究不正）／警告的な規範（ティーチングの放棄／不適切な助言・メンタリング／同僚教員を蔑んでみせる／怠慢な論文指導／十分に構造化されていないコースワーク／教授活動における視野の狭さ／不適切な量のアサインメント／大学院プログラムの軽視）／結論

4章 機関種別と学問分野によって規範への支持はどのように異なるか

機関種別と規範への支持（機関種別と不可侵の規範／機関種別と警告的な規範）／学問分野と規範への支持（学問分野と不可侵の規範／学問分野と警告的な規範）／機関種別と学問分野によって差のない中核的規範

5章 個人的属性によって支持する規範がどのように異なるか

ジェンダー（ジェンダーによる規範の支持の異同）／国籍（国籍による規範の支持の異同）／教員歴（教員歴と規範の支持）／立ち上がってきた問い

6章 支持する規範と教員の業績および職務関与度との関係

職位（職位による規範の支持の異同）／学科長などの管理職経験（管理職経験によ

る規範の支持の異同) / 大学院教育への参加度 (大学院教育への関与度による規範の支持の異同) / 研究活動 (研究活動による規範の支持の異同) / 終身在職権 (テニュアステイタスによる規範の支持の異同) / 立ちあがった問い

7章 コアとなる規範、分化する規範、そして鍵となる分化要因

不可侵の規範: コアとなるもの、分化するもの (学生の努力への敬意のなさ / 学生の業績の横取り / 学生への嫌がらせ / 不正の隠ぺい / 指示に基づく研究不正) / 警告的な規範: コアとなるもの、分化するもの (ティーチングの放棄 / 不適切な助言・メンタリング / 同僚教員を蔑んでみせる / 怠慢な論文指導 / 十分に構造化されていないコースワーク / 教授活動における視野の狭さ / 不適切な量のアサインメント / 大学院プログラムの軽視) / 規範の支持に影響する要因 / 分化する不可侵の規範 (学生の努力への敬意のなさ) / 分化する警告的な規範 (ティーチングの放棄 / 不適切な助言・メンタリング / 同僚教員を蔑んでみせる / 怠慢な論文指導 / 十分に構造化されていないコースワーク / 教授活動における視野の狭さ / 不適切な量のアサインメント / 大学院プログラムの軽視) / 鍵となる問い / 結論

8章 大学院における社会化と大学院教育の規範の内面化

概念枠組み / 大学院のティーチングとメンタリングの諸側面と規範の内面化 (教室のコミュニティ [授業科目のデザインと計画 / 授業科目の内容の扱い方 / 授業内外における学生とのインタラクション / 学生の課題と試験の評価] / 徒弟制 [助言とメンタリング / 大学院生 RA による指導 / 修士論文・博士論文指導]) / 大学院での社会化のさらなる成果 (大学院での研究からの旅立ち / アカデミックキャリアにむけた熱意の高まり) / 結論

※ [] 内は項の中に設けられた見出し

9章 大学関係機関は大学院における指導規範をどのように支えているか

American Association of University Professors / 学問分野ごとの倫理綱領 / 結論

10章 大学院における指導・メンタリングの規範の内面化に関するその他の側面

大学院教育改革の作業のなかで描きだされた規範 / 教員のための指南書のなかで描きだされた規範 / 結論

11章 結論ならびに研究、施策、実践への提言

ファインディングスの要約 / 追加して検討された問い / 結論 / いくつかの発見に対する考察 (歴史学と規範の支持の分化 / 教員歴と規範の支持の分化 / ジェンダーと規範の支持の分化) / 今後の研究に向けた提言 / 施策と実践に向けた提言 / 結語

以下、本書の内容について概説する。イントロダクションでは、本研究が規範に着目する理由が述べられている。筆者らは、規範を特定の社会集団、専門家集団のなかで共有された信念ととらえ、専門家が仕事上の選択を行う際のガイドラインとして、また禁止事項や処方箋を示し自己規制をもたらすものとして機能しているとする。そして、一般に学士課程においてよりも大きな自律性が教員に与えられている大学院において、その自律性の維持と、クライアント（同僚教員、学問共同体、そして大学院生）の幸福保護との間に均衡をもたらすという点で、規範は非常に重要な役割を果たしているというのである。このような規範を特定し議論することは、大学院教育改革にもつながっていく作業であると著者らは位置づけている。

1章は実際にあった大学院教員の不正の実例紹介、続く2章は本研究の中核となる質問紙調査についての解説である。この調査は、カーネギーの大学分類（2005年版）における高水準の研究大学（Research University/Very HighとResearch University/High）の大学院に所属する、生物学、化学、歴史学、心理学の教員を対象に行われた。

質問紙では124の教員の行動が並べられ、それぞれが、望ましい行動か、望ましくない行動か、5段階で評定するという形式であった。なおBraxton氏とBayer氏は、学士課程教育における教員の規範を分析した類書"Faculty Misconduct in Collegiate Teaching"(The Johns Hopkins University Press, 1999)を過去に発表している。大学院教員向けの124の質問項目の開発には、この研究の蓄積も生かされている。

Appendixに収録されている124項目は、以下AからGの7カテゴリーに分類されている。下に例示した通り、質問項目はすべて否定的なワーディングになっている。

A 大学院生リサーチアシスタントの管理・監督（17項目）

例) 大学院生が革新的な結果を出し始めると、いつも研究プロジェクトから外す

B メンタリングと指導（18項目）

例) 自分の指導院生に対する非難をほかの教員に述べる

- C 大学院の授業科目の計画（10 項目）
 - 例) 授業中の活動が前もって計画・用意されておらずゼミやラボの最中に考えられる
- D 授業中の実践や行動（36 項目）
 - 例) 分析や批判的思考ではなく授業内容の記憶が強調される
- E 授業の成績評価や試験のあり方（12 項目）
 - 例) 採点された試験や論文が教員から大学院生に即座に返却されない
- F 学位論文の指導（16 項目）
 - 例) 大学院生の草稿にフィードバックを与えるまでいつも 1 か月以上かかる
- G 大学院生と大学院教育に関するその他の行動（15 項目）
 - 例) 自分の専攻の大学院カリキュラム策定への参加を拒む

3 章から 7 章は、データ分析にあてられている。そのうち 3 章では、統計的解析によって 124 項目から「不可侵 (inviolable)」の 5 つの規範と「警告的 (admonitory)」な 8 つの規範を析出し、後続の章の土台をつくっている。これが本書の中核的な知見の一つである。すでに目次で示したが、筆者らが導き出した計 13 の規範を一覧として再掲する（下記）。

不可侵の規範

- 学生の努力への敬意のなさ
- 学生の業績の横取り
- 学生への嫌がらせ
- 不正の隠ぺい
- 指示に基づく研究不正

警告的な規範

- ティーチングの放棄
- 不適切な助言・メンタリング
- 同僚教員を蔑んでみせる
- 怠慢な論文指導
- 十分に構造化されていないコースワーク
- 教授活動における視野の狭さ
- 不適切な量のアサインメント
- 大学院プログラムの軽視

「警告的な規範」の「教授活動における視野の狭さ」のみやや分かりにくいかもしれない。これは、教授活動においていわゆるポリティカル・コレクトネス（政治的公正）が欠けていることを指している。

4章から7章では、これら13の規範が、回答者の属性や職務経験等とどのように関連しているのかをつぶさに検討している。

8章から10章は、規範がどのようにして個人に内面化されているのかという社会化の過程がテーマになっている。8章では前章までの分析結果をもとに、9章では大学団体等の綱領を材料に、10章では大学教員向けのガイドブック等を参照しながら考察がなされている。

最終章（11章）では本書のまとめが述べられている。施策と実践への提言としては以下の5点が挙げられている。

- ① 各学協会は大学院生に関する文章を倫理綱領に加えるべきである。あるいは教員と大学院生の関係における倫理的なよりどころとなるルールを明記した文書を新たに作るべきである。
- ② 大学院での社会化プロセスを通じて、将来教員になる大学院生に対し、5つの不可侵の規範と8つの警告的な規範を説き聞かせるべきである。
- ③ 大学は、大学院でのティーチングとメンタリングに関するフォーマルな行動綱領を開発すべきである。
- ④ 大学は、大学院でのティーチングとメンタリングにおける誤った行為に関する申し出について検討するフォーマルな委員会を設置すべきである。
- ⑤ 大学は、大学院でのティーチングとメンタリングにおける様々な間違っただ行いに対する制裁を定めるべきである。

②以下は大学がなすべき事項であるが、①は大学院教育に各学問コミュニティがコミットするよう提言しており目新しい。

本書は教員向けのガイドブックではなく研究書である。また筆者らも明記しているように、調査対象が、研究志向の強い大学院の、特定4分野の教員に限られている点には留意が必要であろう。

世界でも高い求心力のある大学院システムを持つアメリカにおいて、大学院教員はどのような意識を持って教育・研究にあっているのか。日本の大学院教育

に生かそうと前のめりになって読むのではなく、まず、そのような視点で本書を眺めてみると面白いのではないか。

(谷村 英洋)

注

- (1) <http://grad-schools.usnews.rankingsandreviews.com/best-graduate-schools/top-education-schools>, 2013.3.1 閲覧 .
- (2) <http://peabody.vanderbilt.edu/bio/john-braxton>, 2013.3.1 閲覧 .
- (3) <http://www.sociology.vt.edu/people/Bayer.html>, 2013.3.1 閲覧 .
- (4) Appendix 以下は割愛する。

5. Lucy Russell 著 『Dr Dr, I feel like... doing a PhD』

Continuum International Publishing Group,
London, New York, 2008

著者の Lucy Russell は、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジで教えている。また The Independent 紙等に教育関係の記事を寄稿するフリーライターとしての経歴も持つ。

「先生、先生、博士号をとってみたいんですけど…」と題した本書は、内容のほとんど全部が PhD の取得を希望する、あるいは PhD コースへの登録を希望する学生あてにかかれたものであり、研究指導者向けのマニュアルではない。この点では第 2 部の 7 で紹介する訳書『博士号のとり方』に極めて近い。

他方、著者は主としてイギリスの大学院を舞台に想定していると見られる。この点で PhD 課程のとらえ方は教育課程的であるよりもむしろ自学自習機会風であり、アメリカの大学院を想定した本と微妙に異なっている。また著者の経歴の影響からか、理解しやすい平易な文体でかかれており、多くのインタビューや手記等も自由自在に引用している。さらに若者向けの著作といっても研究指導者（2名が想定されている）と大学院生との関係にも触れるところ少なくないから、おのずから研究指導論にもなっている。

次頁に目次を記そう。

謝辞

はしがき

先生、先生、博士課程に入りたいんですけど…

1章 「ドクターになるための処方箋が書けますか」

「PhD とは何だろうか？」 / 「取るまでに何年くらいかかるのか？」 / 「論文の中身はどうやって組み立てるのか」 / 「なぜ PhD を取ろうと思うのか」 / 「研究テーマにたどり着くまで」 / 「本当に博士学位が欲しいのですか？ それはなぜ？」

2章 決意を支える資金

学習資金を見つけること / 研究計画を申し出ること / 楽しいことばかりの学園生活？ / 分かって貰えないのが普通 / 誰か子どもたちの面倒を見てくれませんか？

3章 執筆に入る

学位論文を書くということ / 文献を読む / ノートを取る / 論文を推敲し投稿する

4章 パラダイムとは何だろうか

真理とは何か / 論文の中の Me、Myself、そして「私（I）」 / 着飾れるものは何もない / Dr と呼んで欲しいか / 博士であることを証明するものはない

5章 疑問、そしてまた疑問

「真理」は存在するものなのか？ / 「歴史的真理」というものは果たしてあるのか？ / 「私」は存在するのか？ / ポストモダニズムとホロコースト / 論文から政治的配慮や偏見を排除しよう / 機密調査について / 真理はすぐそこに / 仮に「真理」らしきものが掴めないにしても自分の研究のポイントは何なのか？

6章 鶏が先に生まれたか、それとも卵からか

方法論を記す章をいつ書いたらいいか / 研究方法 / 先取りした論点 / 君の研究に直接に関連する論点は何か

7章 欠かせない副菜—キッシュや茹でキャベツ

連絡の手紙を書く / 小さなミーティングを組織する / インタビューの話題 / 筆写する / 電話でインタビューする / 知りたいトピックをはっきり伝える / エリートへの面談の心得 / 「あの件についてお名前を出して引用してもいいですか？」

8章 健全な視力で視界が見えていますか？

自己不信に身をゆだねる / 完成に焦点を集める / 指導教員の役割 / 締め切り—そし

て提出へ

9章 将来の幸運をみすみす見逃すな

論議を構成すること／「ばんざい！」という日に備えて／PhDのための研究に必須のこと／PhDを取ってからの人生—あとがきに代えて

参考文献

索引

一見して分かるように、博士学位取得希望者すなわち「PhDをやってみたい人」の歩む道筋とステップに素直に沿った構成である。

加えて7章に典型的に示されているように、学位論文を書くのに必要な付加的な手段についても触れており、類書にはない特質である。文筆業に従事する著者らしい配慮が見える。

論文の内容・研究テーマに踏み込んでいるのは5章と6章である。著者は、学校カリキュラムの中にいかにホロコースト（ナチスによるユダヤ人大虐殺）を組み込むかという課題に取り組んで自分の研究を仕上げたようであるが、そのテーマに取り組んでいた間の悩みや惑い、ポストモダンの立場から見た場合の歴史的真理と実証主義との関係など、自分の立場も明示しながら、踏み込んだ考察を繰り返し広げている。

この部分の要点はつかむのに苦労するが、はっきりと分かるのは、著者の本書執筆の態度である、それは、研究指導者として高い位置から見下ろすのではなく、博士論文執筆者と同等の立場から悩みをともにしてゆこうとする姿勢である。「あなたはPhDコースに在籍し、研究の完成をめざし、論文を計画し、書き続けている。そのことがまさに、あなたが地上に存在し、生きていることを示す何よりの証拠なのです」(P.66)といった記述には、著者の苦労が滲んでいる。政治的にホットな課題であろう「ホロコースト問題」を取り上げ、しかも歴史的真理とは何かという問題をめぐって方法論上も苦難をなめさせられて来たことを、著者は5章で詳しく語っているのである。

いったん博士号を取ったら何が待っているか。この問いに対して、著者は徹底的に楽天的・肯定的である。その段に至ったら知的にはそれまでと全く異なる広い自由な視界が開かれ、生活的にも明るさが保障される、と繰り返し述べている。

すなわち、感謝と受容、勸奨と激励が本書全体を通じての基本トーンである。

この意味で本書は、時間に追われて機械的に研究を進めて行くための院生マニュアルにはふさわしくない。むしろ生涯学習の一部として博士学位取得を目指すような人々にふさわしい案内書といってよいであろう。

(寺崎 昌男)

6. Joan Bolker 著 『Writing Your Dissertation in Fifteen Minutes a Day : A Guide to Starting, Revising, and Finishing Your Doctoral Thesis』

Henry Holt and Company, New York, 1998

本書の著者である Joan Bolker はアメリカの臨床心理学者である。一方で、Harvard Writing Center の共同設立者としてかわり、UMass-Boston でも Language Place を立ち上げ、ライティングの助言と指導をしている。その他にも、Wellesley, Brandeis, M.I.T. でライティングのカウンセリングに携わっており、これまでに数百人もの大学院生の博士論文の執筆を指導してきた経歴を持っている⁽¹⁾。他の著作には "The Writer's Home Companion" (Henry Holt and Company, 1997) があり、ライティング指導では実績のある人物である。

本書は、これから博士論文を執筆する大学院生と指導する教員の両方の立場へのアドバイスをカバーしたものである。ただし、アドバイスは圧倒的に大学院生に向けられており、しかも具体的である。加えて、単なるハウツーものとは異なり、ライティング指導の現場経験豊富な著者の実体験からのアドバイスが、論文の執筆プロセスに沿って展開されているのが特徴である。

大学院生に対しては、丁寧な執筆プロセスを示しつつも、細かいことにこだわりすぎず、とにかく毎日少しずつでもいいから、論文執筆の作業を進めるようにとアドバイスをしている。これが本書タイトルの「Fifteen Minutes a Day」の由来となっている。ここで重要なのは「Fifteen Minutes」という時間の問題ではない。「a Day」、つまり、毎日執筆作業を継続することである。毎日小さな目標を定めて、それをクリアしていくというステップの繰り返し、博士論文完成への道筋となっていくことを著者は強調している。

本書の目次は次の通りである。

1章 博士論文を書き始める前に

目標達成までの道すじを書き出す／あなた自身の作業過程を展開する／テーマを選ぶ／調査を行う／論文は誰のもの？／いくつかの格言 (maxims)

2章 指導者と委員の選定

指導教員／審査委員会／指導教員をうまく利用する／博士論文偏執病 (paranoia)／指導教員とのトラブル

3章 執筆に取り掛かる

執筆のプロセスを考える／行動原理 (behavioral principles) を利用する／執筆に熱中する状態を作り出す／“書き流し”と“書き散らし”／日々の執筆目標を設定する

4章 ゼロ稿から第1稿へ

ゼロ稿／第1稿／第1稿に取りかかる／問いを立てる／第1稿への2,3のアプローチ／第1稿を書き上げるためのさらなる戦略

5章 中間地点へ到達する：これまでのプロセスと進捗状況を振り返る

博士論文を再検討する／執筆のプロセス／執筆の進捗状況／締め切りについて／R & R < rest & rewards > - 休息とごほうび

6章 外側からと内面からの妨害

外部 (他者や環境) からの妨害／自分ではどうにもならないこととどうにかできる妨害や出来事／自分の内面からの妨害 (相反する感情 - Ambivalence / 自信を失う - Static / 書くことへの恐れ - Writing Scared) / 煮詰まった時の気分転換

7章 あなた、あなたの読者、そして博士論文のサポートグループ

あなた自身のため、そして読者のために書く／あなたとあなたの論文の読者／博士論文のサポートグループ (博士論文のサポートグループを立ち上げる：チェックリスト／博士論文のサポートグループ：期待できる点、問題点、そして話し合い)

8章 修正する：第2稿及びそれ以降

修正のプロセスを考える／効果的な修正戦略／修正、並びに真実を記述すること - Truth Telling

9章 完成した博士論文こそ最高の論文

成長の代償／疲れ果てる／急げ！／起こり得る最悪のシナリオ／論文のディフェンス／その後

10章 博士論文執筆後の人生

博士論文を出版する／（出版する理由と出版しない理由／本を出すか、各章を論稿として分割するか）／博士論文を論稿として発表する／博士論文を本にする（出版計画を書き、出版社を見つける／出版社に却下されたら／本の宣伝文を書いてみよう）／著者になる

付録1：コンピュータの進化は博士論文の執筆にどのような影響を与えたのか？

コンピュータを使うことによる利点と犠牲／コンピュータとソフトウェアを選ぶ／コンピュータのデメリット（機械の故障／ファイルの損失／身体的な問題／体裁を整える際のトラブル）

付録2：指導教員へのいくつかのアドバイス

指導教員の役割／フィードバックと論文の所有権－Ownership

役立つ文献と資料の紹介

内容としては、最初の3つの章で論文のテーマの選定や執筆のプロセス、指導教員の選び方など、博士論文を書き始めるにあたって必要な事柄について説明している。

1章では、博士論文を書き始めるうえで大切なこととして

「図書館の席を確保することでも、最初の章の冒頭から文字を埋めていくことでもなく、頭の中で論文の各段階における執筆の準備や、作業プロセスにおいてリサーチャーとなることの準備をイメージすること」(p.3)

と述べている。そうすることによって、論文執筆に対する情熱や好奇心、テーマについての疑問などが喚起されるとしている。

2章では、指導教員の選び方や付き合い方を中心に説明している。指導教員は、博士論文の指導という点でも重要であるが、他方で博士学位取得後の研究者としての人生において、長きにわたって「〇〇教授の教え子」という称号がついて回るといふ例を挙げ、自分自身の研究者としての将来も見据えて、慎重に指導教員を選ぶことを推奨している (p.20)。

3章では、いよいよ執筆着手という段階へのアドバイスとなり、1章で示した

執筆プロセスの考え方や毎日の目標の立て方などを具体的に説明している。

続く4～7章では、論文執筆の中核となるプロセスへのアドバイスとなっている。執筆や修正の際の注意点についてはもちろんのこと、想定される執筆の「壁」や行き詰った時の気分転換の必要性などについても言及している。

4章では、これまで毎日のように書き流してきた論文の断片を第1稿 (first draft) としてまとめ上げ、構成していくプロセスを説明している。

5章では、完成論文作成へ向けて、博士論文として形となってきた論文の内容を再検討し、執筆の進み具合を検討する作業についての説明となっている。また、ここまで書き続けてきた疲れを癒し、次の目標に向かうための休息 (rest) と自分へのごほうび (reward) としての気分転換法についてのアドバイスもなされている。

6章では、博士論文を執筆する途中で立ちほだかる「妨害 (Interruption)」について、自分自身の内面からの問題と外側の環境的な問題の双方について、起こり得るケースと対処法についてアドバイスをしている。例えば、内面からの問題のひとつとして、結婚や出産、恋愛、博士号を持っているものと同等の給料をもらえる職業への就職や昇進といったことをきっかけとして、論文を完成させたいという気持ちと辞めてしまいたいという気持ちの相反する感情 (Ambivalence) に直面することがあるという。この感情のシーソーゲームに打ち勝つ方法として、第一にこの状況をしっかり認識したうえでシーソーゲームの場から立ち去ること、第二にシーソーに無理やり力を加えて一例えば応援してくれる友だちと関わったり、指導教員に頻繁にメ切を作ってもらったりして一論文を書きあげる方向へ持っていくことを挙げている。そして、自分自身の中の矛盾を認め、笑い飛ばすことを学び、執筆の作業を継続することを薦めている。

7章では、博士論文を自分のためだけでなく、論文の読者を想定して書くことの重要性和、客観的な意見や視点を取り入れるためのサポートグループの必要性について説明されている。特にサポートグループ (主に大学院の同じ専攻や研究室の仲間と構成されている) については、応援団であり、読者であり、信頼できる批評家であり、編集者でもある、論文完成への心強い伴走者であることを強調している。

続く8章以降では、博士論文の仕上げと完成した後の注意点について触れられている。

8章では、完成に向けての最終段階として、第2稿以降の修正のプロセスにつ

いての説明と注意点などのアドバイスがなされている。

9章では、完成段階となった博士論文について、提出前に起こりがちなトラブルや、口述試験におけるディフェンスの方法などが説明されている。

さらに、10章以降では、博士論文執筆後に論文を本として出版するプロセスや論文執筆の際のコンピュータ利用の利点と起こりがちなトラブルについてなど、かゆいところに手の届くようなアドバイスが続いている。

一方、指導する教員に対しては、付録 (Appendix) として扱われているが、指導における重要なポイントはきちんと押さえられている。著者は、論文のアドバイザーとして最も大切なことは、教員の「位置、態度」(stance) であるという。例えば、指導教員は、学生の研究と自分の研究とで明確な線引きをし、適正な距離を取りつつも、学生の研究の細部に十分に入り込んで指導することができるような距離感が必要であるということ、そして、論文の批評をする前に、ポジティブで誠実な励ましの言葉をかけないと、学生が自分の論文の内容や指導教員との関係に不安を覚えてしまうということ、そして、論文の指導者になるということは、親、コーチ、セラピスト、先生など、執筆する大学院生にとってのあらゆる助言者になることであるということなど、数百人ももの大学院生の論文指導をしてきた著者ならではの役立つアドバイスが書かれている。

以上のように、本書では、博士論文のテクニカルな内容に終始せずに、博士論文を書くにあたっての執筆者としての理念の持ち方や、各執筆段階で起こり得る精神的な変化にも言及している。著者はこの本について、大学院生たちが自分自身の執筆スタイルと進捗状況に合わせて使えるような「do-it-yourself book」であり、書くことを楽しめる著者となれるように手助けをするためのものであると述べている。「論文執筆法」なる文献は他にもあるが、本書のように心の機微にまで踏み込んだものは少ない。博士論文を書いている学生の心理をよく理解している著者ならではの。

英文としても読みやすい文体で書かれており、コンパクトなペーパーバックなので、気軽に読めて役に立つ一冊である。

(谷田川 ルミ)

注

(1) Joan Bolker's Home Page (<http://www.cs.umb.edu/~eb/joan/index.html>, 2013.1.17 閲覧.)

7. エステール・M・フィリップス他著 『博士号のとり方 —学生と指導教官のための実践ハンドブック—』

エステール・M・フィリップス、デレック・S・ピュー著
角谷 快彦 訳
出版サポート大樹社、2010年

<原著>

How to Get a PhD: A Handbook for Students and their Supervisors
Estelle M. Phillips and Derek S. Pugh
Open University Press, Berkshire, 2005

大学院指導者と博士課程在学者の双方を読者に指定したテキストである。原著はイギリスのオープンユニバーシティ刊の本で、日本でこの種の邦訳テキストとしては先の近田氏の訳書に次ぐ第2の訳書ということになる。

原著者の「まえがき」によると、原著は1987年が初版で、2009年には4版が出てこの訳書となった。イギリスでも相当に普及したテキストと思われるが、4版までに簡体字中国語、スペイン語、ポルトガル語、繁体字中国語、ロシア語、アラビア語、韓国語に翻訳されたという。

著者のうちE. M. フィリップスは「独立教育コンサルタント」と紹介され、「研究生への助言と博士課程学生および指導教官向けのトレーニングの実施を専門としている」と記されている。いわば博士学位取得に向けてのプロフェッショナルな指導者ということになる。訳書の副題が示す内容から見ても最適の執筆者と言ってよい。同時に、このような肩書きと役割を持つ専門家が存在すること自体に、博士課程を取り巻く環境の日英差というべきものを感じる。

もう一人の著者D. S. ピューは、オープンユニヴァーシティのビジネススクール国際マネジメント専攻の名誉教授で「博士課程プログラムの設計と博士課程学

生の指導に多くの経験を持つ」と紹介されている。

末尾の訳者紹介によると、^{かどやましりこ}角谷快彦氏は訳本刊行の2010年当時はシドニー大学行政大学院博士課程の在学者となっているが、それ以前にはIT関連企業コンサルタント、早稲田大学大学院公共経営修士（専門職）修了等の経歴を持つ。

他方、このテキストの邦訳企画そのものは、「大学院教育向上実践会」という名の研究者グループが立てたものだという。そのグループは「日本の大学院教育向上を目的に、国外の有益な図書を日本に紹介する若手研究者のグループ」（P.310）だという。こういう事情ならびに発行所が新潟市にある「出版サポート大樹社」となっているところからも、異色の出版背景を持つ文献であるということが出来る。だが同人誌のようなものではなく、奥付によれば本訳書は2010年1月25日に初版が出されているが2ヶ月後の3月25日にはもう再版が発行されている。相当強い需要をもって迎えられているテキストであると見られる。

本論だけでA5版298頁におよぶ本書をくまなく紹介するのは難しい。

先ず、印象的な序文「日本語版に寄せて」の中の著者の強調点を紹介しておこう。著者は言う。

「研究学位の取得の鍵となるのは学生と指導教官の関係です」（p. 4）

指導者と学生との「関係」こそが大学院教育の根幹であることを明示している点は、先の近田氏訳メルボルン・テキストと全く同じである。

しかしこのことはしばしば誤解されやすい、と著者たちは言う。自分たちが本書で明らかにしたかったのは、この「関係」（の中身）を明確化することであり、その明確化を通じて「学生は指導教官が学生に期待していることを知った上で指導教官と付き合いことができ」るし、「指導教官も学生が自分たちに何を期待しているかを知り、学生の期待に応えることができるようになります」（p. 4）とある。

このテキストで学生と指導者の関係を繋ぐキーワードは、相互の「期待」である。メルボルン・テキストでは相互の「理解」が、これに当たるキーワードであった。こうしたことは、そもそも研究指導の本質を考える基礎、さらには研究指導テキストを執筆する基本動機を語るものといえるのではないかと思われる。すなわち日本の大学院でしばしば見られる教員・学生相互間の不信と冷たい相互評価では

なく、研究者としての指導者への信頼と学生の成長への期待が前提とされ、またそれらが指導場面に生まれることを著者たちは信じている。そしてそれらが大学院教育の基礎に置かれなければ研究指導は始まらないという哲学が、両著に底流しているのである。

本書は全 12 章から成る。その章タイトルのみ記しておこう。

第Ⅰ章	博士課程の学生になる
第Ⅱ章	博士課程に入る
第Ⅲ章	博士学位の本質
第Ⅳ章	博士号をとらない方法
第Ⅴ章	研究の仕方
第Ⅵ章	博士論文の型
第Ⅶ章	博士課程のプロセス
第Ⅷ章	指導教官との付き合い方
第Ⅸ章	英国系、白人、男性、フルタイム、異性愛者が圧倒的多数を占める アカデミック環境で生き残る方法
第Ⅹ章	審査制度
第Ⅺ章	指導と審査の仕方
第Ⅻ章	研究機関の責務
付 録	学生のための研究進捗自己診断
	訳者あとがき
	参考文献

直ちに明らかのように、このテキストの最大の特徴は、終始一貫して大学院課程を志願し、また在学し、あるいはそれを修了した学生自身に語りかけているところにある。序文から付録まで、その姿勢は一貫しており、メルボルン・テキストが大学院生にも語りかけながらも、実際は研究指導者向けテキストという性格を濃厚に持っていたのと比べると、大きな違いである。

冒頭部分で著者たちは書いている。

「本書は博士課程の学生のためのハンドブック、サバイバル・マニュアルである。」(p.23)

このように断言した上で、読者が学位取得に一歩踏み出そうとしているなら、本書は大学、研究科、指導教官選びに役立つだろうし、既に院生なら博士号取得のスキルを教える本になるだろう、また指導教官になろうとしているのなら学生を無事に研究学位へ導く教育的プロセスを学ぶことができるだろうし、大学院管理職者なら大学院定員の考え方に適切な答えを与えるだろう、と宣言している。すべての教員を指導「教官」と訳しているのは私学に身を置く筆者にとって違和感を免れないが、全体の編集方針は明快である。

以下の12章のすべてを紹介することはできない。特色と思われる点をわがままに取り上げよう。

第1に、先に挙げた特徴、すなわちこのテキストが「学位を取りたい」学生を読者として予定している、という特徴は、前掲第Ⅱ章以下の各章の記述に顕著にあらわれている。例を挙げると、指導教員の選択は学位を得るステップの最初に遭遇する最も重要なポイントだ、と断言した上で、

- ① その学者は最近論文を執筆しているか？
- ② 研究室は効率よく運営されているか？
- ③ 研究助成は受けているか？
- ④ 国内外の学会に呼ばれているか？

という判断基準を示し、「これらのうち、複数の回答が肯定的であることが望ましい」(p.39)とまで指摘している。メルボルン・テキストには見られない辛辣な判断基準である。その上で、「どれくらい親しい関係をその学者と持ちたいか？」(p.39)という基準を示している。時には結婚生活においても経験しないような長時間の密接な関係を持つことになるかも知れない、とも指摘している。

先に掲げた全体目次からも明らかのように、本テキストは修士学位と博士学位の違いについて特に詳細に論じている(第Ⅲ章)。また、修士課程から博士課程への「登録変更」についても触れている。こういったポイントは、マスターコース、ドクターコース間の乗り換えが比較的自由なイギリスの大学院制度と密接に関係した説明であろうが、日本の大学院生たちにとっても十分に便利な説明であろう。

また、修士と博士でオリジナリティーにどれほどの違いがあっていいのか、同

じく「資料を使う」と言っても、博士学位を取るために使う資料と修士学位のそれとはどう違うか、といったポイントが詳細に語られている。これらは、修士課程の上に博士課程が積み上がる日本の大学院の学生たちにとっても極めて有用な知識であろう。

この他、学生を読者にしていることから来る本書の興味ある点は、挙げればきりが無い。「博士号をとらない方法」と題された第Ⅳ章のパラドキシカルな叙述などは、大いに興味を引く。

しかしそれにもまして興味深いのは、第Ⅸ章で取り上げている「英国系、白人、男性、フルタイム、異性愛者が圧倒的に多いアカデミック環境」での生き残り方策である。もう一段詳しい小目次をあげると、この章には「英国の博士課程文化」「人種上の嫌がらせ」「女子学生」「セクハラ」「ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダー学生」「障害者ハラスメント」といった項目が並んでいる。学生の視点に立ってこうした問題を大胆に取り上げているのも、メルボルン・テキストには見られない特色である。

この章で特に印象に残ったのは「パートタイム学生」にとって学位取得がいかんにかに難事業であるか、それを乗り越えるにはフルタイム学生と違ってどのような生活スケジュール、学習スケジュールが必要かを、具体的にまた懇切に説いている部分である。大学院が生涯にわたる学習の一環になるであろうことを考えると、日本の大学院にとっても他人事ではないポイントであり、この点で先掲5や6とも共通している。

このように本書は設定している読者層が学生であるということから生まれる多くの特色を持っている。

しかし大学そのものへのアドバイスを忘れている訳ではない。第Ⅻ章はそのテーマに集中している。

「大学運営者に向けて書かれている」(p.265)というこの章では、大学院指導への取り組みは全学的規模でなされなければならないこと、同じ地域の大学との連携（「ハブの形成」）の必要性、博士課程学生のための研究環境の整備、全学的な大学院への導入課程設置の重要性、留学生への語学サポート、といった諸点について細かに説いている。

そして最後には、「指導教官のトレーニング」が強調されているだけでなく、教授たちにとって博士課程の学生指導は「クレジット制」すなわち給与が保証さ

れる職務になるべきであり、大学はそうようにすることによって研究指導活動を評価することができるという。さらに教員一人が担当する学生は最大限6人であるべきだというのがわれわれ著者の考えである、とも言い切っている。

このほかの内容に踏み込めば、限りない特徴を持つテキストである。くり返すが、その特徴は、大学院生を読者に措定するところから始まったものと見られる。また、これまで触れなかったが、イギリスの大学が大学院指導の充実と効率化を求められている背景には、サッチャー期以来の大学への新自由主義的な効率化政策があることも窺うことができる。もちろん著者たちがそれに対して触れるところは少ないけれども、若干の批判的ニュアンスを読み取ることができる。

(寺崎 昌男)

おわりに

私事ではあるが、本学に職員として勤務する傍ら、他大学の修士課程（桜美林大学）を経て、さらに別の大学の博士課程（東京大学）に身を置き、本年3月、単位取得満期退学に至った。現在博士論文作成に取り組んでいる。この稿を、当センターの職員としてのみならず、博士学位取得に向けて研究指導を受ける学生という立場も踏まえて記すことをお許しいただきたい。

今回取り上げた6点のテキストのうち、3点は学生を主対象としたものであった。テキストをめぐるディスカッションに参加しながら気付いたことであるが、それらの内容には下記のようないくつかの共通点を見出すことが出来る。

1. 博士論文を書き上げるまでの見直しを持つこと
2. 指導教授の選び方、つきあい方
3. 執筆の勧め
4. 博士学位の本質
5. 論文の修正と仕上げ
6. 審査
7. 困難や障害への対処法
8. 学位取得後

言われてみれば、すべて常日頃気になっていた事柄である。ただし、私の場合、このように整理されてはならず、もっと混沌としていた。社会人学生であるが故に、当該大学コミュニティへの関与が浅くなってしまいうせいかと思っていたが、今回紹介されたテキストに触れ、それだけが原因ではないと気付かされた。

このような学生向けハンドブックが発刊されていることから、海外でも博士号取得を目指す学生の悩みは多いと推察され、そうであるならば、日本の伝統的なタイプの学生もまた迷っているに違いない。学生向けハンドブックが広まることにより、博士号を取得しようとする学生が遭遇する困難は、かなりの程度軽減されるのではないか。

教員が研究指導に苦勞していることも明らかになった。今回特別にご寄稿いただいた近田政博名古屋大学准教授は、大学教員には研究室運営や研究指導のロールモデルが少なく、加えて事例・ノウハウが共有されていないことを指摘しておられる。本冊子の「はじめに」において小澤副センター長は、「研究指導ハンドブッ

ク」の意義を述べられた。指導する教員の立場からも、この種のテキストは有用であると言ってよいであろう。

今回取り上げられたテキストの数は限られており、かつ詳細に読み込んだ上での紹介ではないというのが執筆者たちのコメントである。にもかかわらず、大学院生の学位取得に向けて、大学が組織的に、それも全学的規模で取り組むべき事柄がある、と指摘する箇所に複数出会った。

先ごろ文部科学省により「教育指標の国際比較」が公表された⁽¹⁾。それによると、「大学院在籍者の人口 1,000 人当たり人数」は、日本では 2.06 人である。これと比較して、韓国では 3 倍強 (6.63 人)、欧米では 4 倍以上 (アメリカ 9.35 人、イギリス 9.52 人、フランス 8.80 人) に上る。数値を単純に比較することはできないが、日本の大学院生の比率が低いことは明らかである。今後、日本でも大学院進学者の数や比率を増やし、高度な知識と技能を持った者をより多く輩出していくという方向性は、強まりこそすれ弱まることはないであろう。

当センターが、本冊子の発行につながる調査・研究に着手したのは 2011 年であった。当時は、博士学位の数を増やすこと、そのために大学院教育の制度を整えることが、本学にとって重要かつ優先的な課題なのかという点について、それほど明らかではなかった。その 2011 年から 2 年が経ち、本年 4 月には「大学院教育検討ワーキンググループ」(座長：加藤睦副総長)による検討結果が大学院委員会に報告された。この間に、大学院教育は本学が組織的に取り組むべき課題として明確化されたのである。

センターは、本年度の計画として、大学院教育に関わる新たな企画を立てて実行していく予定である。一連の調査・研究は地道ではあるが、それらが現実を変えていく一助となることを念じて止まない。

大学教育開発・支援センター課長

今田 晶子

注

(1) http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/kokusai/index.htm,
2013.5.10 閲覧。

●大学教育開発研究シリーズ バックナンバー

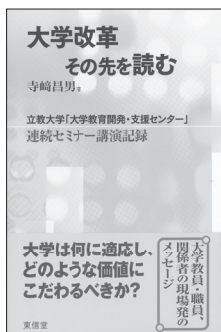
- NO.1** 外から見た立教大学
—ミッションと社会的要請— (2006年)
- NO.2** 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック
—学生の積極的な学習を励ますために— (2006年)
- NO.3** 変化する高校生と大学への期待
—高校から見た立教大学— (2007年)
- NO.4** わが大学・わが学部の教育改革を語る
—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム— (2007年)
- NO.5** 立教大学の初年次教育とその展開
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道— (2007年)
- NO.6** 学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて— (2008年)
- NO.7** 立教大学の今後と中教審の審議
—学士課程教育の再検討と将来を考える— (2009年)
- NO.8** バージニア工科大学視察報告
—米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ— (2009年)
- NO.9** 立教大学における学習支援と図書館 (2009年)
- NO.10** 立教大学におけるアドミッション・ポリシー (2010年)
- NO.11** アクティブな学びをデザインする
—4つの授業をめぐる対話— (2010年)
- NO.12** グローバル化に対応する大学教育の在り方
—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ— (2010年)
- NO.13** 大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方 (2011年)
- NO.14** アクティブな学びをデザインする vol.2
—学生の気づきを促す3つの対話— (2011年)

NO.15 学位取得へ導く大学院教育のあり方
—博士後期課程を中心として— (2012年)

NO.16 日本の大学に求められている国際通用力とは (2012年)

NO.17 学びが高まる学習環境とは
—ハード、ソフト、コミュニティー— (2013年)

●連続セミナー講演記録



寺崎昌男『大学改革 その先を読む』(2007年)
東信堂 ¥1,300

執筆者一覧

〔特別寄稿〕

近田 政博 (名古屋大学高等教育研究センター准教授)

〔立教大学 大学教育開発・支援センター〕

小澤 康裕 (副センター長、経済学部准教授)

谷村 英洋 (学術調査員)

谷田川 ルミ (学術調査員、2013年3月まで)

寺崎 昌男 (センター顧問、立教学院調査役)

今田 晶子 (課長)

編 集

谷村 英洋 (学術調査員)

谷田川 ルミ (学術調査員、2013年3月まで)

今田 晶子 (課長)

大学教育開発研究シリーズ NO.18

大学院研究指導への誘い^{いざな}

—海外マニュアルの紹介—

2013年5月発行

発 行

立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail : cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

制 作

株式会社アクセスリード

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー 24階

TEL : 03-5774-2330 FAX : 03-5774-2339



RIKKYO UNIVERSITY